

## 鄭秀「私の日本留学」

私が日本留学を夢見始めたのは中学校の時だった。その時、日本は世界第2の経済大国だったため、自分の国より遥かに豊かな国だった。テレビのニュースで日本の科学進歩を賞賛するときは正直悔しいところもあった。領土も広く資源も豊富なのになぜ発展途上国のままなのかと先生に質問することもしばしばあった。私の周りには日本語を第1外国語として習う人がほとんどだった。その影響もあって私は日本留学を決めた。私は中国で念願の医科大学に入学し、将来の夢を叶うため卒業と同時に日本に留学した。

元々消化器病に興味があり、特に潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患は未だ病態が不明で難治性であることが問題となっていた。そこで炎症性腸疾患の厚生労働省研究班の代表である東京医科歯科大学・消化器病態学で、難治性炎症性腸疾患の最新知識、研究手法さらには基礎研究からの臨床応用までのステップを習熟したいと考えた。難治疾患の研究法、臨床応用技術を習得することで中国における難治疾患の基礎研究、治療法開発を向上させ医療技術の進歩できると考えた。

私にとって研究室のすべてが目新しく新鮮そのものだった。臨床の研究室なのに、研究がとても盛んでいる印象を受けた。私は一日でも新しい環境に速く慣れるため、実験器具の名前や実験機器の取り扱い、実験手法を必死に覚えた。また、日本語は中国で勉強したが、医学専門用語にはまったく理解ができず、研究内容を習得するのにとても苦労した。そういう時にいつも助けてくれたのが周りの消化器内科の先生たちだった。分からないことについては、いつも分かりやすい日本語で丁寧に教えてくれた。それだけではなく、研究に役に立つ本も探してくれた。そのおかげで、研究に対しても徐々に慣れ始め、指導者から渡された課題に専念することができた。

博士課程にはリサーチカンファレンス、学会などの発表が多かったため、自分自身をよりスキルアップさせる必要性を感じた。そこで指導者から適切な指導を受けながら研究目的、手法、結果解析を協議するなど、研究を遂行するため努力した。そのお陰もあってリサーチカンファレンスや国内学会の発表のみならず、国外学会の発表もできるようになった。さらに、うれしいことにいち早く制御破綻における腸炎発症に関わる分子、シグナル同定に成功し、海外学術雑誌に論文を載せることができた。

研究に専念するため、生活面で初めは家族の支えと貯金を使い果たした。時間が経つにつれだんだん苦しくなったが、大塚敏美育英奨学財団の奨学金を3年間もらうことができ、研究に専念した結果、研究成果が認められ、渥美奨学財団の奨学金ももらえることができた。

私の人生の3分の1は日本で過ごし、多くの日本の方の助けと国の支援により、多くの研究成果を上げることができた。東京は気候が暖かく、町もきれいなので、とても住みやすく、まるで自分の故郷のようであった。また、研究室の皆さんと食事をしたり、釣りをしたりなど課外活動もとても充実していた。

将来は中国の大学病院において炎症性腸疾患の基礎・臨床研究、治療法開発に従事したいと思う。中国においては日本と同様の問題を抱える可能性が非常に高いと考えられる。大学院での研究成果をもとに中国において炎症性腸疾患の研究手法、計画を構築して問題点解決への糸口としたい。将来は炎症性腸疾患の治療に中心的な役割を果たす専門家として成長し、医師としてリーダーシップを発揮して医療の発展に寄与したい。その一方で炎症性腸疾患の専門医師を育てるために、臨床および研究の両面から指導をすることで、専門医師の拡充を図り炎症性腸疾患患者の増加に速やかに対処できる環境を整えると共に、最終的にはアジアの拠点の一つとなり、日本と連携して難病対策を行うことを目標としている。